

# 夏目漱石とクラシック音楽

(第8回)

## 親バカな漱石

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

夏目漱石は神経衰弱の発作が起きると、周囲をひどく困らせた。恐怖におびえる家族の姿は、漱石没後100年（2016年）の特別企画、NHKの土曜ドラマ『夏目漱石の妻』（第二回）でも、強烈に描き出されていた。再放送もされたので、御覧になった方もおられるであろう。

しかし長男の純一は父のことを、神経衰弱の発作が起きると恐怖だったが、ふだんはとても温和な人であった、と随筆に書いている。

ところで、『吾輩は猫である』（十）は、漱石家の朝が素材になっている。主人公の猫はひもじくて泣くが、女中は気づいてくれない。三度目には「にゃごおうにゃごおう」と複雑な泣き方をするが、この「ベトヴェンのシンフォニーにも劣らざる美妙の音」も女中には通じない。仕方なく茶の間に戻ろうと、風呂場の横を過ぎた時、猫を見た。女の子たちで風呂場が「なかなか繁昌」していた。一番年下の子は「バケツの中から濡れ雑巾を引きずり出して頻りに顔中撫で廻している」。うがいをしていた長女が、「坊やちゃん、それは雑巾よ」、と取り上げようとすると、「いやーよ、ばぶ」、と引っ張り返す。雑巾から雫が垂れて、膝のあたりから足までしたたかに濡れた。これを発表した明治39年頃の漱石は、すでに娘ばかり4人の父親だった。猫が語る光景は微笑ましい。

さて、明治も40年代に入ると、国産ピアノの生

産台数が伸びてブームとなった。森鷗外は長女茉莉のために、明治41年8月ピアノを買った。明治42年6月、漱石家もピアノを購入した。『三四郎』の初版が購入資金に充てられた。

ピアノを買う事を承諾せざるを得ん事になった。代価四百円。「三四郎」初版二千部の印税を以て之に充つる計画を細君より申し出づ。いやいやながら宜しいと云ふ。子供がピアノを弾いたつて面白味もなにも分りやしないが…（明治42年6月21日付の日記）

ピアノを買うのに乗り気でなかったような書きっぷりだが、子供が弾く音は好きだったようだ。

…小生、小供の為にピアノを買わせられ候。ピンピンポンポン中々好音を發し申候（畔柳芥舟宛、明治42年7月26日付）

ピアノ購入の件は、ベルリン留学中の寺田寅彦へは明治42年11月28日付の手紙で知らされた。

…君が買へ買へと云つてゐたから、ピアノが到着した時は第一に君の事を想ひ出した。…筆[長女]が稽古をしてゐる。それで来年の春は同じ位の年の人と一所に演奏会へ出て並んで何かやるんださうだからえらいね。

この手紙の漱石は、我が娘のことを「えらいね」と自慢していて、彼らしくない気がしないでもない。相手が気心の知れた寅彦だったからであろうが、漱石にも親バカな一面があったのだ。